

つまらぬ才能を育てるな！

「才能教育」7号（一九四九年）より

鈴木鎮一

くり返し行われるところに、才能が育つのです。いいことでも、悪いことでも、同じようにすぐ才能が育ちはじめます。

子供が何かをすると、すぐに「そんなことをしちゃあいいけません」また何かをやろうとするとすぐに「また、そんなことを……」と言って叱る人をよくみかけますが、これでは子供は手も足も出ぬことになる。このくらい叱ってばかりいれば、いたずらをしない最も良い子になりそうなのに、事實は、反対で、そういうやり方ではその子供はますます手に負えなくなつてゆくのです。

なぜでしょう。即ちくり返し行われるところへは、才能は育つてゆくわけでありますから、そのように叱つてばかりいる親の訓練によって、子供の中に「叱られる

人は、このような愚かな育て方をせられないでしょう。

雑草はとらねば、米麦の育つわけはありません。教え諭さなければならぬこと、叱り、矯正しなければならぬことは即ちそれに当りますが、叱ることの効果が少しもない人間に育てあげてしまつては、どうすることもできないではありませんか。

ヴァイオリンの指導、矯正の場合と同じように、最悪の矯正すべきもの一つを、親が心に定めておいて、これに関する限り一歩も譲らず、矯正指導するように

る才能」がどんどんと成長してゆくためです。

叱られる才能……それはやがて叱られることは当り前のことであつて、何とも感じない心へまで育ちます。親の方は、自分がそうした才能を子供に育てていることには気が付かぬために、子供が悪いのだと決めています。

「叱るそばから、すぐにまたいたずらをして……ほんとうに何という子だろう」
と一層、いらいらしてくる。

（中略）

自分が子供の中にそうしたものを訓練し育てあげておいて、子供の性格のせい、とより考えない人、それが今日までの親の姿でありましょう。

万能の素質をもった人間の姿をよく理解して下すつたして、平常叱つてばかりいるような下手なやり方をやめましょう。

叱られる才能を子供の中に育てさえしなければ、子供は決して手に負えないような、そうした才能、性格を持つているものではありません。

みな親達がつくりあげ、育てあげた姿、環境のままに、子供も大人も育てられるものであります。これが人間の本性であると思ひます。

矯正するために叱ることも、やむを得ないことかも知れませんが、もう一つ上手な方法は、叱らざるを得ないようなことについては、叱るよりもまず心して親達が正しいことをやつて、毎日子供に示してゆくこと、これこそ最も効果ある正しい教育の方法であると私は思ひます。環境で育てるのです。

周囲のあるがままの姿に、子供は育つてゆきます。大阪の子供さんが一人も残らず大阪弁になり、東京の子供さんが一人も残らず東京弁になる事實は、善も悪も、美も醜もなく、人の才能は環境のままに育つものであることを明らかに示している、重大な事實ではありませんか。

